

高津区おはなしアーカイブ

●宮田 進 (みやたすすむ)さん

昭和 15 年生まれ 74 歳

川崎市高津区新作在住



◆宮田家の歴史をお聞かせください

この家で生まれて育ち、引っ越しの経験はありません。昔は、ここから下のバス通りまで木々がうっそうとしていて、坂も急でした。林の中に我が家があるという感じで、子どもながらにとっても怖かったです。

新作には宮田姓が集まっています。後ろの宮田家は本家です。

宮田家の歴史を調べますと、鎌倉時代の北条執権のとき、三浦半島の上宮田(かみみやた)という場所にいたようです。御家人の三浦一族の領地でした。御家人は領土を管理し、生活を豊かにするために地頭を出す必要がありました。現住所付近を宮田一族が任されたようです。宮田兄弟の兄のほうは埼玉県比企郡方面を受け持ち、この地方を受け持ったのは弟の宮田兵庫之助(ひよ

うごのすけ)でした。私たちの祖先にあたります。余談ですが、埼玉の宮田の子孫には、NHKアナウンサーで有名な宮田輝さんがいます。先祖の兵庫之助は、富山の高岡で釣鐘を鑄造し、鐘を野川の影向寺に寄進しました。大きな釣鐘でした。釣鐘には、願文、寄進者名が彫られていました。しかしながら、この鐘は戦争中に供出され、今はありません。拓本にして残しておけばよかったと檀家の方々と残念な気持ちを話し合ったこともあります。戦国時代から江戸時代の新作村の様子は、新編武蔵風土記や旧家の古文書に書いてあるのでわかるのですが、さすが南北朝時代以前になると資料がありません。

新作の地名が古文書に初めて登場するのは「小田原衆諸領役帳」です。

◆昔の新作の様子は

昭和 13 年頃に軍需工場の日本光学が進出し土地を手離すときがありました。戦前のことです。その後新作第 2 町内会が設立されました。町会史が発行されています。

新作団地の古い竹やぶの中に横穴式住居跡があったり、新作山崎谷戸の山の上には中村家が建てた地蔵があります。古東海道「小高谷戸」という人もいます。

久本、末長、久末などは、願望地名と言って、多摩川の水の怖さを知っている住人が、「末永く、久しく、この地に住みたい」と言って名づけた地名です。でも、新作村

の村落は、一部を除いて高台にあったので、多摩川の水害の影響はありませんでした。昭和初期までずっと 50 数軒のまま変わりませんでした。これは、鎌倉時代からあまり変わってないとも言われています。

昔はどこの家も井戸水がありました。我が家には今でもあり、池に流しています。保健所の検査で飲料水として大丈夫と言われていますが、飲んでませんね。

墓地は自分の土地のどこかにありました。村のあちこちに分散していた墓を戦後に養福寺や影向寺に集めました。本格的な耕地整理ですね。農地解放も関係していますね。

新作の農地は、軍用地となった所もあったので、米作りだけでは生活できず水田に野菜作りもしました。中原区の小田中あたりと違い、新作には都立園芸高校に行った者がほとんどいないので新しい農業の方法が伝わらず、根菜類や葉物しか作れませんでした。昭和 30 年から 40 年代では、葉物の需要が増えて、小松菜の 4 毛作をしたりしました。頑張れる農家は 7 毛作までやりました。小松菜は同じ畑から何回収穫しても連作障害を起こさないからです。

「青少年の家」にある記念碑「武蔵野音頭」には、どこそこの村の農産物、特産物は何かと、碑に刻まれています。

昔から農家に婿入りすると、けっこう苦労するとよく言われましたが、新作では、婿は大切にされたと言われています。それは、家族が協力し合って農業をしてきたか

らでしょうね。新作には「ムコの会」があって情報交換が盛んです。湘南レッドという赤玉ねぎは、「ムコの会」がオニオンスライスとして食べることで生産量を高める研究をして成果をあげました。

昔の新作の商店は、第 2 自治会の魚屋や都筑青果店くらいでした。他の村には渋谷酒店、坂本酒店もありました。この魚屋さんでよく買うのは秋刀魚でした。ここの鮭は今思い出しても、塩っぼくて、塩っぼくて……。お祭りや宴会のときは千年にある有名な魚屋「うおのぶ」から鯛のお頭つきなどを取り寄せました。

◆どのような学生時代を過ごされましたか

橘小学校に入学しました。昭和 21 年 4 月です。千葉県習志野市にあった兵隊宿舎を解体して建てた校舎です。1 年生のときは、1 クラス 55 人でした。2 年生になると 3 クラスに増えました。2 部授業になり午後から学校に行きました。壁を外すと 2 クラスから 3 クラスになるような教室の作りでしたね。橘小学校の生徒が一挙に増えた理由は昭和 22、3 年頃に満州からの引揚げ者が毎日のように増えていたからです。引揚げ者のために日本光学の独身寮が開放されたのでしょうか。その後第 2 自治会も大きくなりました。今の「市営末長団地」あたりですね。

当時の子どもの遊びは、山に入って食糧を探すことです。特に秋の栗拾いはさかんでしたね。あの頃は学校の先生だって、給料があったとしても、食べ物が買えない時代でねえ・・・。

中学は、橘中学校です。当時は、西中原中学校、中原中学校、高津中学校と3校ありましたが、どれも遠くて親父たちが市教育委員会に掛け合ってくれました。しばらくして橘中学校が建ち、少し遅れて入学しました。だから1期生です。新作八幡宮の山を削って、水田だった耕地を埋め立てたのです。そして木造2階建ての校舎ができました。合唱コンクールがあり、ヨハン・シュトラウスの「美しき青きドナウ」を混声3部合唱で歌ったことが忘れられません。

修学旅行は京都・奈良、夏のキャンプは多摩川の上流の「鳩ノ巣」でした。

高校は、多摩高校に入りました。ここも1期生です。父からは、「県立川崎高校に行け」と言われましたが、母からは「とにかく近い学校が良い」と言われて多摩高校に決めました。大学は横浜国立大学に入学して、社会科の教員になりました。その後、何校かの教員、教頭、校長を経験しました。市の指導主事や教育委員長なども経験しました。給食会の仕事などに従事したり、現在は学校経営診断研究会の顧問をしたりしています。

思い起こしてみると、昭和10年代生まれの人々は「どうしたら、食糧を手に入れら

れるか」ということがいつも頭にありましたね。考え方の基本が「どうしたら、新しいことができるか」を考えます。しかし、昭和一ケタ生まれの人々は、「戦争で正しいと思っていたことがある日突然、覆された」わけですから、物事に対してとても慎重に考えます。接近していますが、2つの世代には違いがあると私は感じています。

◆特に小学校時代の忘れられない思い出は

戦時中のグラマンのことですね。小学校入学前でした。アメリカの航空母艦から立川基地に爆撃に行く途中、このあたりの頭上が、グラマンの通り道のようなとき、高射砲に当たった敵機がこの地に落ちました。現在の新作団地西側です。大騒ぎになって、本家の宮田家長男と一緒に見に行きましたよ。飛行機の両翼からピンク色をした燃料が漏れていてびっくりしました。飛行機の燃料はどこか機内のタンクに入っているのではなく、つばさに入っていることを知りました。本家の子とガソリンを抜き取ろうとしましたが、大人たちに「危ないから子どもは、どけっ」と言われてしまいました。飛行機は萱場の上に落ちたのが良かったのか、パイロットはまだ生きていましたよ。当時、団地の西側には広い萱場があり、毎年、萱を本家と分家で分け合って皆で協力して萱葺きをしていました。大人の背丈まで伸びていたその萱がクッシ

ョンになったのでしょう。そのパイロットは駆けつけた 62 部隊(青少年の家)により、救護所に運ばれたと思います。

また、小学校の潮干狩りの経験は、その後の私の人生に大きく影響しました。金子先生という新任の先生との思い出です。

世の中で食糧もお金もない昭和 25 年頃、その金子先生が、「明日、マンガ(三本鍬)を持って来い。潮干狩りに行くぞ」と言って、もう一人の若い先生とリヤカーに私たちを乗せて、川崎大師の先の「出来野」に連れていってくれました。カマスと言って、むしろを二つ折りにした袋も 8 枚持っていきましました。面白いほどアサリが取れて、帰りはそのカマスが満タンですよ。生徒たちが原稿用紙を買えない時代に、先生はそのアサリを魚屋に売って原稿用紙に代えてくれたのです。また、そのアサリを家に持ち帰ったら、母が喜んでねえ。次の朝に食べました。今でもアサリは大変好きです。

金子先生の困っている人を助けようという心に感激しました。今、思えば学校から出来野までの距離は往復約 30 キロくらいです。学校は海拔 22 メートルですから道中そんなに山坂がありません。それに当時の人はよく歩きましたから、先生の発想はごく普通だったかもしれません。確か、朝早く出発して夕方には帰れました。私の「海は遠い」という考えは見事に吹っ飛び、「先生って、すごいなあ。先生みたいな人になりたいなあ」と思うようになりました。私

は川崎区の学校を退職後に給食会に務めましたが、この潮干狩りのアサリを皆で食べたことが原点ですね。

◆どんなご家族でしたか

私のすぐ下に妹、その下に弟が 2 人の 4 人兄弟です。両親と祖父母の 8 人家族でした。祖母は、上作延の関口家から嫁いだと聞いてます。父は、橘農協設立の発起人のひとり代表監事になりました。今で言うと、橘小学校の隣の橘支所の手前のところにありました。父はいつも「人生は節目が大事だ」と子どもたちの学校の周年行事には必ず出てくれましたね。私は運動会の徒競走が嫌でねえ、とにかくビリなんですよ。弟たちは早いのですが。しかし、学芸会があると、なぜか私が主役なんです(笑)。私たち兄弟 4 人は仲良くて、一緒に遊ぶというよりも、家の仕事をよく手伝いました。そして、父親の話も 4 人で集まってはよく聞きました。

お祭りは春、夏、秋とありましたが、10 月 15 日の秋季大祭が一番にぎやかです。奉賛会は昔からありましたが、父は礎会(いしづえかい)を独立して作りました。昭和 53 年です。戦後 33 年は仏事の 33 回忌にあたり、新作の互助の精神を再確認したかったのでしょう。戦没者の出た農家の農作業を皆で支援しあう会です。神社を中心として、新作村の 54 軒がそういう農家を応援しました。

◆父上を大変尊敬なさっていますね

5年前に95歳で亡くなりました。

父が戦争からなんとか無事に帰ってこれたのは、終戦の年の12月でした。満州から移動して南方の小笠原の父島に移動していました。帰る日に横須賀の久里浜港まで母と迎えに行きました。貫禄があって立派に帰って来るだろうと期待してた姿は、やせ細り老人のようで、その変わり果てた姿に思わず母に「本当にお父さん？」と聞いたほどです。どれだけ過酷な目にあっていたのかとショックでした。

父が昭和12～13年頃の戦時中に書いていた日記が残っています。現役兵として帰還したときのことを「人々が溝ノ口駅から『万歳！』と旗を振り、橘小学校の生徒たちも出迎えてくれてその列は新作八幡神社まで続いていた」と書かれています。

私たち4人の子どもたちに色々な話を聞かせてくれましたし、戦争に行く前に私と妹が生まれ、戦後には下の弟が2人生まれました。

本当に有難かったのは、私が中学のときに、修学旅行と夏のキャンプの2つの行事に参加させてくれたことです。普通なら、米と野菜作りの収入だけですから、金銭的にどちらか1つしか行けません。でも、あとの妹や弟たちの3人も平等に行かせてくれました。

あのときの夏のキャンプは楽しかったなあ。楽し過ぎてまた行きたくなり、高校時

代にアルバイトでお金を貯めて、裏磐梯に友人らとキャンプに行きました。自分たちの隣のバンガローにいた女子高校生の一人が妻です(笑)。

中学時代の経験は本当にその後の生き方に関係しますね。私が、不登校の子をキャンプに連れて行きたいと思う理由は、その楽しさを身をもって知ってるからです。

私が小さいときから中学になっても私の父母は毎年1回、祖父母に留守番を頼み、6人の家族旅行を楽しみました。山梨県の下部温泉などに連れていってもらい、子ども心に温泉っていいなあと思いましたよ。私たち4人兄弟は所帯を持つと、昔の家族旅行のお礼に、今度は皆で費用を出し合い、毎年両親に家族旅行をプレゼントしてきました。母が亡くなっても、父が94歳になるまで、この旅行は続けました。

そんな父が60歳の還暦のとき、突然大学を受験すると言い出しました。子どもを全員大学に行かせたことや、若いときに自分が都立園芸高校に行けるほど裕福ではなかったことと関係があるのかもしれませんが。最初の年は合格しませんでした。なんと61歳で、東京農業大学造園学科に合格しました。サークルも華道部に入部しました。父は65歳で大学を卒業しましたが、華道部の活動にはその後もずっと大学に通っていました。この家の庭もすべて父によるものです。父が生きてる間には、四季折々の花が庭で咲き誇っていました。父がすごいと

思うのは、94歳で亡くなるまで、大学で勉強したことを約30年間役立てたということです。

父の死後、兄弟で父が残してくれた言葉を1冊の本にしました。

新作の風土が父を長生きさせてくれたと思っています。互助の精神、助け合い、人に迷惑をかけないという土地の人の優しさや協力性が父の肌に合っていたのだと思います。私も父の影響を受け、父を尊敬し、父のようになりたいと思いましたね。

(平成26年8月27日実施)